

# 経理業務を効率化させる 「デュアルディスプレイ」の すすめ

デュアルディスプレイを導入すれば、複数のソフトを立ち上げての作業が容易になり、業務の効率化や作業精度の向上などが期待できます。その活用法を紹介します。

リライル会計事務所  
公認会計士・税理士

野 口 五 丈

## デュアルディスプレイとは

マルチディスプレイには、大きく分けて、次の2つの使い方があります。

1つは、1台のパソコンから複数のディスプレイを使って画面表示する「拡張モード」としての使用方法です。

もう1つは、パソコンに表示された画面と同じ画面を映し出す「ミラーモード」としての使用方法です。

本稿では、「拡張モード」を想

定して、1台のパソコンに2つのディスプレイをつなげるデュアルディスプレイについて活用のポイントを紹介します。

## デュアルディスプレイを導入するメリットとは

経理業務にデュアルディスプレイを導入するメリットは、大きく次の5つがあります（図表1）。

- ① デスクがスッキリする
- ② 会計ソフト等への入力がすばやくなる
- ③ 資金繰り表などの各種書類作成の作業効率アップする
- ④ 情報が拾いやすくなり、入力等のミスを防止できる
- ⑤ 様々な資料を参照して全体把握ができる

各種経理業務において、デュアルディスプレイがどのように活かされるのかについて、具体的に解説します。

### (1) デスクがスッキリする

経理業務の基本的な業務の1つが、請求書などの書類作成です。請求書を作成する際に、契約書や過去の請求書など元資料となるものをデュアルディスプレイで表示させて参照すれば、デスクの上がスッキリします。

請求書を作成するにあたって、元資料が必要ですが、元資料をデスクに広げながら作業すると、どうしてもデスク周りが雑然となりがちです。

そうしたことを解決してくれるのが、デュアルディスプレイの活用です。元資料が社内のデータベース上にあるのなら、資料の印刷はせずに、デュアルディスプレイを活用しましょう。

片方のパソコンで元資料を開き、もう一方のパソコンで請求書作成画面を立ち上げて入力することができます。そうすれば、デスク周りに紙の書類が散らからないので、手元がスッキリした状態で作業ができます。

### (2) 会計ソフトの画面を大きくし

たまま入力作業ができる

デュアルディスプレイを活用すれば、会計ソフトへの入力速度は上がります。

なぜなら、1つのパソコンのみでExcelやPDFなど複数のアイテムを開きながら作業すると、会計ソフトの画面が入力しづらくなってしまいうからです。

会計ソフトの画面を最小化して、複数のアイテムを並べて表示することは可能です。しかしその

図表1 デュアルディスプレイ活用の主な  
メリットと留意点

メリット	留意点
<ul style="list-style-type: none"> <li>①デスクがスッキリする</li> <li>②入力速度アップ</li> <li>③作業効率アップ</li> <li>④ミス防止</li> <li>⑤全体把握が可能に</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>①場所の確保</li> <li>②振込業務には不向き</li> </ul>

場合、表示はできても各ウィンドウが最小化するために、入力がしづらくなってしまう。

会計ソフトを使用するときの主な作業は、伝票入力です。

伝票入力の際に必要な情報は、取引先や取引金額、日付や取引明細などです。それらの情報をパソコン上で確認しながら入力していくためには、1台のパソコン画面で、データを並べて表示する必要があります。

そんなときにデュアルディスプレイを活用すれば、会計ソフトの画面をわざわざ小さくする必要はありません。

片方のパソコンで請求書などの

ExcelやPDFを開きつつ、もう一方のパソコンで会計ソフトを全画面で立ち上げておけば、必要以上画面をスクロールしたりせずに入力作業に集中できます。

このように会計ソフトへの入力時にデュアルディスプレイを活用することで、作業効率を上げることが可能になるのです。

### (3) 画面を切り替えずに売掛帳等の更新作業ができる

売掛帳や買掛帳を会計ソフト以外のExcelなどで管理している場合にも、デュアルディスプレイが活躍します。

売掛帳や買掛帳において必要になる情報は、取引先、取引日付、取引金額、取引明細、入金や支払期日が必要です。また、入金や支払いが行なわれたときには、その記録もしなくてはなりません。

それらの情報を帳面へ入力する際、1台のパソコンだけで処理しようとする、画面が見づらく、欲しい情報を見つけにくいという問題が起こり得ます。

そんなときも、デュアルディスプレイを活用してみたいかがでしようか。一方のディスプレイで売掛帳や買掛帳を全画面で表示し、もう一方の画面で請求書デー

タや銀行の取引明細を全画面で表示すれば、画面の切替えが不要になる、帳面をスムーズに更新することができま

### (4) 資金繰り表等の作成時に数字の入力ミス防止に役立つ

ディスプレイに資料を全画面表示することで効率化が進むのが、資金繰り表の更新作業です。

資金繰り表は、社内にあるすべての取引における入出金情報をもとに作成されるものです。そのため、小さなスクリーンのなかで更新しては、数字の入力ミスなどが起きる可能性があります。

資金繰り表のシートも、その元になる資料も、どちらもデュアルディスプレイで全画面表示すれば、情報が拾いやすくなり、数字などのタイプミス防止にも役立ちます。

経理業務のなかでも、特に資金繰り表の更新作業は、デュアルディスプレイの活用が大いに期待される業務です。

### (5) 前月の集計データを確認しながらデータ加工が行える

売上明細や原価明細などの細かな情報を集計する際、複数のディスプレイがあれば、前月の集計データ等を全画面で確認しながら、

データの加工を行なうことができます。

集計データの加工が毎月の業務である場合、前月に行なったデータの加工方法と同じ方法で加工する必要があります。

そして、前月のデータを見直す際に、たとえば1つのディスプレイのなかで見返していると、どちらが前月でどちらが当月のデータなのかわからなくなることがあります。このとき、誤って前月のデータを上書きしてしまう恐れがあります。そうした作業ミスを防ぐために採用したいのが、デュアルディスプレイです。

データ加工をするCSVなどの元データは、情報のボリュームが多いので、1つのパソコン画面だけではなかなか収まらないものです。同じディスプレイ上でさらに前月のデータを広げてしまうと、どうしてもデータが見にくくなってしまいます。

デュアルディスプレイであれば、片方のディスプレイに前月のデータを参照用として置いておけるので、誤って上書き保存してしまいう心配はありません。

デュアルディスプレイの活用が、大切なデータを誤操作で失う

のを防いでくれるのです。

## (6) 各種資料を展望しながら経営資料を作成できる

売掛帳や買掛帳、資金繰り表の場合と同様に、経営資料の作成にも、デュアルディスプレイの活用は大変おすすめです。

経営資料の作成では、社内の売上、仕入、経費の情報に加え、現場から上がってくる営業資料や人事関係の書類など、とにかくありとあらゆる情報を確認していく必要があります。

デュアルディスプレイ（または3台以上のディスプレイ）を活用すれば、経営資料に必要な情報を複数表示させることができます。

経営情報というのは、単一で検討できる事柄だけではなく、多角的に経営をとらえることが多いものです。そうしたときに、デュアルディスプレイで必要な情報を同時に全画面表示すれば、社内の情報を広く見渡すことができ、思考がはかどります。

## (7) 入力ミスがわかるように、全画面表示で「合計欄」を見ながら決算書を作成できる

決算書の作成時にも、デュアルディスプレイは活躍します。

前述のとおり、何かの資料を作

成するとき、元になる情報の範囲が大きくなればなるほど、デュアルディスプレイの活躍の幅は広がります。

決算書の作成もまた、同様の理由から、デュアルディスプレイを活用することで作業がスムーズに進みます。

特に決算内訳書の作成については、各勘定科目の金額やその明細を入力する際、必要になる情報は勘定科目によって異なります。

デュアルディスプレイを活用すれば、手元のディスプレイに決算書の画面を映しつつ、もう一方のディスプレイに残高証明書など確認したい勘定科目に関連した資料を表示しておけば、作業効率が上がります。

決算書データの情報を入力する際、その画面は常に全画面表示しておき、合計欄まで見えるようにしておけば、入力ミスにもいち早く気づくことができます。大事な決算書の作成ミスを防ぐためにも、デュアルディスプレイの活用は大きな意義があるのです。

## デュアルディスプレイを導入する際の留意点

デュアルディスプレイを導入す

るにあたって、留意点として次の2点が挙げられます。

### ① スペースやコンセントの確保が必要

### ② 振込業務には、おすすめできない

もともと、経理業務の運用形態は、企業によって様々です。ここで留意点として挙げていても、それが全企業に当てはまるとは限りません。自社の運用形態と照らし合わせながら、デュアルディスプレイの運用を検討しましょう。

### (1) スペースやコンセントの確保が必要

当たり前ですがディスプレイの設置には、ディスプレイを設置できるだけのスペースが必要です。

ディスプレイはそれなりに大きなものになりますし、デスク上に置くスペースがない場合は、モニターアームなどの備品を購入して、設置する必要があります。

また、仮に設置する場所があつたとしても、プラグを差せるコンセントを確保しておく必要があります。場合によっては延長コードも必要になるでしょう。

導入時だけは設定に時間と手間がかかるのが、デメリットだと言えます。

なお、メインパソコンは内勤がメインの人はデスクトップ型が、外出も伴う人はノート型がよいでしょう（図表2）。

### (2) 振込業務には、おすすめできない

振込業務を行なうときは、デュアルディスプレイでの表示はあまりおすすめしません。

なぜなら、振込業務のときに別のデータが立ち上がっていると、振込業務に集中できなくなってしまうというデメリットがあるからです。

ミスなく振込を実行するためにも、振込業務のときはデュアルディスプレイを使用しないことを心がけるとよいでしょう。

図表2 デュアルディスプレイを利用する際のメインパソコンの選び方

用途	内勤がメイン	外出時でも使用
種類	デスクトップ型	ノート型
ディスプレイサイズ	21～27インチ	16インチ程度
高さ調節機能	推奨	—
ピボット機能（横軸回転）	推奨	—

のぐち いったん 監査法人、会計事務所等を経て2012年独立。クラウド会計支援に強く、導入支援実績は全国1位。本来力を入れたい付加価値の高い業務に注力できるよう企業をサポートする。